はじかみカレー

文殊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
はじかみカレー

【Ｎコード】
Ｎ４５２４Ｊ

【作者名】
文殊

【あらすじ】
カレーに関することで喧嘩になった兄とその同居人。
料理が好きでカレーパウダーから作ったカレーは、どんな味？
弟である神谷は適度に間を取り持ちながら経緯を見守る。

「……どうせ、辛いだけなんだろ」
せっかく作ったカレーを見て、目の前の男はそう言い放った。
それで気分が悪くなった政谷は、鍋を持って鞄を持って、部屋を出た。
昨日のことである。
そのカレーは昨日の夜、今朝、そして夕食に政谷と弟の胃に入る。
「人がせっかく作ったカレーを、辛いだけだとか言いやがって……！」
「それは多分、この前のカレーが悪いんだろ」
冷静な弟、神谷の言葉を聞いて政谷の眉間に思いっきり皺が寄る。
神谷は兄の表情を大して気にもせず、「おかわり」と皿を差し出した。
「あれは、あいつが喰うと思わなかったんだよ……」
この前のカレー、確かにそれは原因ではある。
せめてもの言い訳をしながら、神谷の皿を持って政谷は立ち上がって鍋の方へと歩いていく。
政谷が同居人である宮田のサークルでの飲み会の日に、自分のために作ったカレー。
辛いものが大好きである政谷は特別にハバネロパウダーを加えた刺すように辛い、と一般には思えるカレーを作った。
比較的辛いものが平気な神谷も、さすがに水を共に汗を流しながら食べた一品である。
まずくはない、というかむしろ美味かった。
しかし、それは宮田には刺すように痛い何か、としか捉えられなかったのだ。
次の朝、テーブルの上にある皿に思いっきり残ったカレー。
それについて政谷が怒ると、逆に怒られた挙句に宮田はこう言った

らしい。

『もう金輪際、お前の作ったカレーは食わん』

料理が趣味で、特にカレーパウダーを自分で作るのが好きな政谷は我慢できずに昨日カレーを作ったのだ。
荒い気性の割に珍しく我慢して気を使って、甘口唐辛子で作ってまでどうにか食べてほしかったらしく。
言葉も荒いが、一応謝った。
「それだってのに、『どうせ、辛いだけなんだろ』！」
思い出してまた腹が立っているのか、神谷の皿に山盛りにルーを注ぎ足していく。
もう二度と戻らねぇ、と呟きながら皿を手渡す。
「じゃぁ、俺と一緒に住むの？」
「それ以外にあると思ってんのか？」
顔にこそ出さないが、神谷にとってこれほど好都合なことはなかった。
料理が趣味で、サークル活動もさほど盛んではない兄との共同生活は願ったりである。
サークルは飲み会などの面倒事に顔は出さないが、試合やら何やらで忙しく。
家のことは、比較的ほったらかしになってしまう。
それを「仕方ねぇな、お前は」なんて母親のようにやってくれる兄と一緒に住めるなんて。
母を早くに亡くして姉も祖母もいない家、父はあくまでも父であり続ける姿勢をとった。
女手の役割を担った政谷に対して、未だ甘えが抜けない神谷は急に弟というか子供らしい笑顔を見せる。
「……俺は、嬉しいな」
「おい、急に何言い出してんだよ」

「辛いのも、まろやかなのも、普段喰わないようなのも、カレーじゃないのも」
政谷の料理は、全部好き。
そう口にすると同時に、政谷の携帯が鳴り響く。
「出ないの？」
「お前、ちょっと俺風呂だって言って」
携帯を押しつけてどこに行くわけでもなく、そのまま目の前で宮田との会話を聞くつもりらしい政谷は腕を組む。

『久城、開けろ』
「……えぇと、俺は政谷じゃない方の久城ですけど」
『あ？　あいつまた人に電話させてんのか。おい、弟君部屋のドア開けてくれ』
「いいですけど、修羅場になんないでくださいね」
『お前の兄貴と修羅場になったら、俺の体がもたねぇよ』
「確かに」
静かに笑って立ち上がると、政谷が目を丸くして神谷を見るが気にせず部屋の扉を開ける。
携帯を耳に当てたまま、背の高いヒゲの生えた男が立っている。
宮田と神谷は一応、政谷を通しての顔なじみである。
政谷の弟である神谷と、政谷の同居人である宮田の間には暗黙の了解がある。

政谷と何かあった場合に相手から頼られたなら、最大限の協力をすること。

これは主に宮田の方が世話になっている約束だが、神谷は一度これに大いに助けられた。
だから些細なことで怒る政谷と、昔のことを気にする性質の宮田のどうでもいいような喧嘩や揉め事の間を取り持つ。

たとえこれから神谷が約束に世話にならなかろうと、違えるつもりはなかった。
「政谷、帰るぞ」
「はぁ！？　てめぇご都合主義もいい加減にしろ！」
どうせ飯作る奴がいなくなってめんどいだけだろ、と顔をしかめて政谷が言う。
神谷はよく疑問に思うのだが、これほどまでに喧嘩や揉め事を起こす二人が暮らしているのはなぜだろうか。
以前宮田になんとなく聞いたのだが、これという答えが返ってこなかった。
『手のかかる二人だな……』
悪かったって、誠意が感じられねぇ、だのというやり取りをする二人を見ながら神谷が口を開く。
「宮田さん、兄貴のカレー美味かったっすよ」
「おい、神谷……！」
「カレー？」
「どうせ夕飯ろくなもの食べてなくて、腹減ってんじゃないですか？」
あがってくださいよ、俺の部屋なんで。
そう言って文句を言おうとする政谷より先に、部屋の主としての権限を使った神谷に内心舌を巻きながら宮田は靴を脱ぐ。
『あぁ、そっか。政谷は、カレーで怒ったんだった』
宮田はのんびりと考えながら、部屋に入る。
カレーの香りが漂う空間は、二人が同居している部屋を思い起こさせる。
もちろん、昨日政谷が一般人とは思えないような目つきで宮田を睨んで、カレー鍋と鞄を持っていなくなったこともである。

「政谷、腹減った」
「お前に食わせるものはねぇよ！」

そう言いながらお湯を沸かしているところを見ると、飲み物を出す気ではあるらしい。
『妙なところで、律儀な奴だ』
笑ってやりたいところだが、笑うと先に進まないのは目に見えているから、と宮田は無表情のまま続ける。
「大体よ、なんで急に怒ったりしたんだ」
瞬間、政谷は信じられない物を見るような顔つきになり。
神谷は顔を覆った。おそらくは、失言を掌の中で笑っているのであろう。
「お前が俺のカレーを『辛いだけ』って言ったからだろうが！」
青筋を立てながら、紅茶を淹れる前のカップを宮田の目の前に突きつける。
「誰もよ、喰わねぇなんて言ってねぇだろうが」
「言ったっつーの！」
二週間前の飲み会の次の日の朝に俺に向かって逆ギレして言った、と丁寧にいつのことだったかまで付け加えて言う政谷。
笑いをこらえきれずに肩が完璧に揺れている神谷を横目に、宮田はだから、と言う。
「反省して食おうとしたけど、辛くねぇってお前が言うより先に鍋持って出てくから悪ぃんだろ」
「はぁ！？」
徐々に苛立ちを見せる宮田に対して、政谷が怒鳴ろうとするその時、やかんが音を立てる。
「お湯湧いたみたいだけど、政谷」
だいぶ落ち着いたのか、何でもないことのように神谷がやかんを指差す。
「知ってるっつーの！」
足音荒く、とはさすがにいかないのか頭を乱暴に掻きながら火を止めに行く政谷の後ろ姿を見ながら宮田がため息をつく。
もうひと押しくらいしてやったほうが良いか、と神谷は立ち上がっ

て政谷の傍まで行き一言。
「俺、寝るから。静かにしてくれ」
「は？」
現在の時刻、九時過ぎ。
大学生が寝るような時間では、通常はないような時間である。
よほど驚いたのか、思いっきり振り返った政谷の肩を軽く叩いて洗面所へと向かう。
歯を磨いて、部屋に入って本当にすぐ寝てしまった神谷は、次の朝に今回の結果を知ることになる。

「……面白い味する。ジンジャーっぽいけど他にもなんか多めにした？」
舌を軽く刺激する程度の辛みに抑えて、広がる薫りがいつもより強めである。
さらに言うと、食べると体が温まるこの感じは生姜の気がする。
素直に感想を言うと、政谷は深く頷いてた。
「やっぱお前に作った方が良いわ……。山椒だよ、山椒」
あいつただ「美味い」しか言わねぇ、と言う政谷の顔を見れば一目瞭然である。
『あぁ、手がかかる』
笑う神谷に対して嫌な顔をしないあたり、今日の夕飯を置いて宮田との部屋に帰るくらいに機嫌は直ったのだろう。
早い時間にバイクの音がして部屋のどこにも宮田の姿がないから、もう帰ったのだ。
神谷は、大きく伸びをしながら呟く。
「俺が名前つけてあげよっか、このカレーに」
「名前？　ジンジャーカレーとかか？」
そのまんまだろ、と笑う神谷を小突いて笑うな、と言った後政谷は問いかける。

「んで？　命名してくれんのかよ、わざわざ」
「古事記では、山椒をハジカミって言うんだけどさ、生姜も同じくハジカミって言うんだよ」
だから、はじかみカレーってどう？
古典なんて全く興味のない政谷には不評かな、と神谷が笑う。
「……はにかみ？」
「はじかみだよ、ちゃんと聞いてた？」
聞いてたよ、聞いてた。と何度も言うものだから余計怪しいな、とは口にせずとも笑ってしまう。

「宮田さんも、はじかみカレー気にいったんじゃないの？」
政谷、今日帰るんだろ、と言って洗面所へ歩く神谷の方を政谷が向いて、言う。
「お前、エスパーか？」
確かにいつもより喰ってたし、俺今日はちゃんと帰るってまだ言ってないよな。
何度も聞いては、あれ、言ったんだっけ。と記憶を問いただす始末。
その姿を見ながら神谷はまた掌で顔を覆って、笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4524j/

はじかみカレー

2011年1月15日20時56分発行